倭訓栞中編 佐之部

九

和書門
類
二一六五一號
八〇函
一架
八二冊

内閣文庫
和書
類
二一六五一號
八二冊
六三函
四架

内閣文庫
番號 和 21651
冊數 82 (43)
函號 263 10

国立公文書館
National Archives of Japan

倭訓栞中編巻之九

佐の部

新撰字鏡に凍とあり小麻の義か

洞津　谷川士清　纂

国初の今マハ紗綾とさあやといふ　さやハ其ちゝ

さあめ

さあや

さあらゝを

さあらさゞ

小狭輿の義後奈良院の御ハ疫癘行幸ゝ

貴布祢乃祢輿と造りしより起るといふ

△さい　俗小飯ふるゝ物とゝ魚菜のゝ飯也○扶桑略記に

乃酒の給ふまさいとゝ○倭名抄ハ頭子と雙六のさいゝ

和の音也職人ハ合ハさゝちぐのさいを追ひ出いきめかゝえ

えゝゝ○犀の音ゝもあり昔ハ信州犀川ハ犀住ゝり頼朝

泉小二郎親衡小命ハて捕しむと吳本東鑑ハ乃ゝ泉

小二郎勁力勇氣也ハ筑摩郡の泉乃産ゝ今も花彈乃

奥山ふ住ゝゝ小犀山犀の異也明和の年ふゝをあふせゝゝ角
額よふゝて本ゝゝ二ツふ分まゝゝ領まそも無れて回ゝゝそ
夫木集ふ
ゝき才ゝゝさいのいき角得てゝふ种のかみてもそさかゝそゝ
乞燃犀の故事とゝあゝゝ也○北山抄大嘗會儀ゝ前後懸犀角
鏡等ゝゝゝゝ
さいゝ　割符の字也ゝいゝ今ハ其器と称せゝ演義文ふゝ
搭膊也信濃ゝて布のさいゝゝゝゝぐんぎちゝゝゝゝ
ちゝゝ甲州も同ゝ武田信玄陣吉ゝ名ゝゝゝ○宰府ハ筑
前ゝゝゝ太宰府の略かゝゝし
さいゝ　雑賀ハ紀州也○財賀ハ三州也財賀寺ハ大江定基の
建立也定基三河守ゝゝしはゝゝゝゝ
渡唐す宋景濂ゝゝゝゝゝゝゝゝ
さいゝ　狭衣ふゝ笄子の音將也かんざゝ也和名抄ふ笄此間

云笄子上音如才ゝゝ
さいだつ　神代紀ふ先字ゝゝゝゝゝゝゝ先立の字也前も同ゝ
さいさき　幸福の字也前ゝゝ字也ゝゝ○花鬘の金ふゝゝ自然
銅ゝも称せゝ
さいゝき　紫氏日記ゝさかゝだちさいゝゝさわゝゝゝゝ
さいちゝ　在處也西土ふ處在ゝゝゝ如ゝ○在地在郡の称安東
郡專當沙汰文ふゝゝゝゝ
ざいゝん　制札ゝ奉行人の姓名ゝ下在判ゝゝゝ官乃裁判ゝ
ゝや在判の字朝野群載ふゝゝゝ
ざいざい　在郷ゝゝゝ略ゝて在ゝのゝもゝゝゝ在ゝ處ゝゝゝ
いゝゝゝゝ也○罪業ハ梵書の沿也
さいふゝ　齋服ゝゝゝ建武年中行事ゝゝもゝゝゝゝゝ
いゝゝ
さいまゝゝ　宰領ゝゝゝ西土ゝゝゝ押解也

さいぐら　催馬樂と云て貢物を献ずる起る名也と
梁塵秘抄ふえをとりさせと大嘗會の時乃歌もまいるを
ハ神馬を牽せ〻る時の樂なるをさいや袖中抄ふ一條左
大臣雅信作と云て○三代實録ふ尚侍從三位廣井女王少
修德操拳動有禮以能歌見称特善催馬樂諸大夫及少年
好事者多就而習之と云へり○倭名抄ふ催馬樂を律我
駒と云へ曲也と云へり
さいきよ　漢書ふ唯陛下裁許之と云へり○さいぐんハ裁判也
さいわう　幸若の舞と云へるものハ室町殿の末とかや桃井氏の
子孫ふ云へ乃山の児と云て幸若舞と云へるものを始たる
者越前ふ幸若村あり今ふ至て大樹乃恩賜あり又幸岩
磨あり幸若と共ふ舞を舞すして共ふ業を傳へて子孫舞
大夫と云へり桃井氏ハ越中國の守護桃井播磨守直常也
幸岩ハ岩松二郎經家の末葉也と云て

さいぐわ　裁配の字也と云へり
さいせん　賽錢ふ云へ或散錢とも云て
さいまぐは　松浦佐ふ物ふかりなるふ拵ふ我ひとり
さいぐはものとかり先曲をとりて狂て狂
云へ曲を云へり
さいのかみ　幸神とかり男女を幸ー婚と結ふ神也と
云へり道祖と倭名抄ふ訓せり行神
也朝野群載ふ出京関間奉幣道神事と云へ今さいの神と云ひ
幸神也とかるを也塵囊抄ふ社まつりきりと云へり○陸奥
名取郡笠嶋の道祖神ハ京の出雲路の幸神の娘なりと云へり
古きものとかるを一説ふ出雲路ハ本出雲と云て地名也幸神ハ
齋神と云へ式ふ所謂出雲井於神社と謬て混と云へる也と云へり
○常陸国高道祖村道祖の祭ふ大きなる男根と木ふて造て名
居ふ掛と云へ○上州乃乙あれ幸神の小石と美濃のかわのなる

又は幸神ふなどとも祈祭る○信州松本の城下正月に市井れ衢の中央に長さ十間餘なりの大柱を立て松竹等をかざる是も幸神と称して又御柱とよぶ小童多く集り柱の下とかつひ童輩の内人と別当と名つけ水なびせて是を食ふ事なり又三球校に辻祭れ幸神と混せ風俗やうに諏訪社三月中酉祭日も御柱とて立る事なり

さいのかわら　俗ふ幼少なるを死れさいの河原に到り小石を積て塔を作るといへば佛経にも此邪説その戯言也河原に小石と積る雙六の目ふ似たりとて賽の川原といふ説ふ大和ふ狭井の河原ふ古石像の地蔵ありしといふ○奥州南部領八の戸に近き大畑といふ上方の山やまの三里餘はて巓に地獄谷ありて賽の河原といふ峯の如き小石とり塔を作る事数幾百といふ然しかるに崩せばまたいつとなくもとれかやうにすなどいふ

さいちんぐち　再進鉢とも今俗さいしきといふ也

さいとひのまとり　後夫名目に嫁娶の夜妻の加護うまの家にうてまわりセたまふ時守て雌雄とりて札かけ作る也

△さうし　常に草子とも草藁の字也本邸に雙紙とも○又冊子ともいふ山谷詩ふ絲虫紫草紙とも云へり○袋紙は造紙とも類聚雑要ふ造紙筥とも○後拾遺集ふかものさうしとも○袋紙合せ○袋紙の名なり○勅撰の行袋紙は外題と端に去勅撰の袋紙は中ふ去と今泉記ふ見へたり　埃嚢抄ふ見へたり○曹司は局也

さうぢ　掃除の音也字国語ふ出○国俗の風に元日より三日の間は掃除せぬは閨中俗不除糞土と五雑組ふいへるかし○源氏蜻蛉に精進とかいへり兼盛百首に忠度集にかに何ものさうしとかいへり大和物語ふさ

うじいりわてしてとみえたり○精進おちと開葷といへ
開ハ杜詩の比年病酒開涓滴といへる開の字義に同じ陳氏の
説に精其心進其志といへり○歌のおもむきいとそれさうじにて
よそなる人もある今いふものの家のふすま障子也杉
障子庭訓にみえ衾障子類聚雑要にみえ又布障子亘障子脇
障子押障子遣戸障子鳥居障子なども見え賢聖障子紫宸殿にあり
宇多帝の時に起るといふ秘抄にみえ帝王編年紀に荒海の障子
昆明池の障子漢書に孝武元狩年穿昆明池とみえ年中行事
の障子なり馬形障子なり通障子なり

さうぎ　閑居の友に山のふもとにいほりかくのやうなかまへてさう
ぎといふものを日に三つくりて人むすめもてこれに出したるとみ
えたり床机の義なるへし

さうり　草履也倭名抄にみえ四ほうしよごうりて仙臺に
ちりぢりてといへ○金剛といへる名ハ安然和尚貪(カル)時作草履人

問之曰金剛之性体これよりいふものハそれなる也といへりされバ
和尚ハ密教者にて真如金剛といへるをもとりて造り出せる
ものなる名なりともいへり全浙兵制にハ女鞋とみえこと譯せ
り戦人所合に板そむでうりもみえたり

さうらい　文選の注に草萊謂山野採樵之人也とみえさう
俗に時宜にうとき人をはいして草萊子といへりまた粗刀をもいふ
ハ其人のさまに似たりそなり

さうがう　大智度論に相好とみえたり今俗にいふ所是也

さうどう　騒動の音也といへり

ざうぶつ　贓物とよめり盗物をいふ也俗に病根をもいふぞぞうぶつとも
つふなるといへる是也

さうざん　本朝式に清涼殿設錦草墪と倭名抄にみえ四名目
抄に草墩ハ陪膳釆女座とみえたり後世の圓座ハ此を制するなる
へしといへり

さゝかい　西宮記ニ拂鞋主上及僧家貴女ノ所用トアリ拂
と草ニも作る假借也天子著御の沓ハ漆履の形にて錦りく張也
つまとゝり○左ニ草鞋といハるゝくゝり也○僧鞋の字西土乃
ちよゝえんもり制呉ものゝやゝ作象ニハ鞋とわいの音ふゝ
さゝまき　庭訓ニ左右米ゝとゝ西太刀のゝ如ゝし
さゝろん　相論ともり或ハ爭論ともり
さゝゝとん　万葉集ニ相同の部と立てり悅目抄ニ相同ともゝ
恋乃ゝ行也ともゝ西
ぞゝやく　驛驛ともり牝馬といふ也一説ニ雜役の家牛ゝ
いへゝと古事談ニもゝえんもり
さゝゝゝ　撰集抄ニ多くゝん西然諾の辞ともめまてさゝり
ゝもゝゝゝもいゝゝ同ゝ今俗ゝゝゝゝやゝゝとり
さゝく　篇海ニ苟簡曰草ゝくともゝえんもり
ゝげん　法華ニ西諺言れ音也ともり

さゝゝやゝゝ　澡浴の音と訛ゝゝゝゝ澡洒手也浴洗身也ゝ
ゝゝえ礼儒行ニ儒有澡身而浴德ともえもり洒與洗古字通ゝ
さゝゝゝ　雙方ともり
さゝゝかゝ　相應ともり口語ニいふ也○四神相應といハ地
相の天象ニ右ハ延ものゝといふ居家必用ニ居宅欲左有流水是云青龍
右有長道是云白虎前有汗池是云朱雀後有丘陵是云玄武為
最貴之地ともえもり
さゝゝゝん　索麵の音ゝゝゝ又索ゝその音ゝゝ索餅も同ゝ七月
七日ニ索麵を用ゐハ十節記ニ是日食索麵其年中無瘧病といふ
ニ据ゝゝ也○海ゝゝゝゝん藻の品也牛のゝゝめんと呼名ハ兎絲
子也ともゝ○醤ゝゝ著ゝゝ煮麵ゝ作ものゝめんゝゝハ
音ともゝゝゝ也
さゝゝぐゝん　古今序ニ倭名抄ニ史ともり佐官の音也
省ニ録寮ニ属司ニ令史諸使諸衛ゝ志法ニ目太宰府ゝ典法

同ー

さゝふるえん　平調楽うて舞ゆ相府蓮て晋の王儉ら家ゝ

蓮とゝもヤ〜附の楽也想夫恋ゝ云ハ張ゆりゝ

さゝのふえ　笙の笛也竹ハ七本ゆり頭ハ相て簧ゆり響サハ

銅也笙石〜いつるゆゝ

さゝのこゝ　倭名抄ふる西筝のこゝ也又ゝやゝれこゝ

えゝゆり琴のこゝれむかへゝいハ稗編ふ筝本頌琴別名ゝ

今琵琶ゝ〜いハ曲の作ふ称〜楽筝ふ異ゝ云ハ故名ふ自

一至五大絃ゝいハ自六至十を中緒ゝ云自斗至巾細絃ゝいのええた

つゝ○隋音楽志ふ筝十三絃〜つゝえゝゆり琴〜も十二絃ゆゝこの

ゆり西京雑記ふ又ゝゆり○韻會ふ筝古以竹為之ゝ西日女

紀の〇古事記の孫〜も竹〜〜こゝ沢造ゆ〜ゆ〜いつ

さゝつゝえゆり　相輪撞〜ゝゆり比叡の山頂〜ゆり一書ゝ

仏仁中ふ最澄心柱と改ゆ名ける〜ゆ〜呼ゝ〜ゝえゝゆり

△さゝえん　菜園也今對馬ゝて〜さゝえん〜ゝゆり○茶園ゝいつ

さゝえのおかえ　法氏おゝえゝゆり才覚の云也正統記ふ和漢の

才覚ゝ西

さゝえ社社のこ　江次第ふ才男ゝ西伶祢楽の称人也

△さゝぎ　竿田ゆし細長き形の因ゝいハ作ゝや片山のゆゝぎ

ゆゝ称ゝ〜ゝえゝゆり

さゝとゝ　牛或ハ雑子ゝいつゆり小跳の云也

さゝのま　棹間ゝ林ふ秘抄ふる西倚子れ覆ゝ竹〜ゆ〜竿也ゝ

いつり

さゝかぢ　祈年祭祝詞ふ棹楕不干ゝ西神功紀ふ不乾

船舵ゝありて加ぢゝゆり

△さゝ　逆ゝゆり坂経の云ゝいつり忤も同ー

さゝー　険ゝいハ坂ゆり知ゝゆや童蒙頌韻ふ龍嵸ゝゆ新

撰字鏡ふ嵯峨峣又峣峴又崩岁又嵳嵯又嵯峨ゝゆ〜ハ

字音とり〳〵訓〳〵せるゝやの霊異記に峯もとり

さがり　倭名抄に鎖とあり懸金もなんさゝハりの義今

に鎖子也〳〵とり

さゝろ　逆艣の義也舟の下〳〵とくむけ〳〵ろとなりと盛衰

記ふるゝなり武後志の両頭船とゝて近し西行法師

さかろ押立石後の志〳〵波ハ荒き志ろかもかゝるとゝろ

さかみ　尾張中嶋郡酒見御厨神鳳拝〳〵名名今酒見村神明

社〳〵に古陶甕ありし〳〵とり本神戸村ありし神名式に酒殿神社

二座酒弥豆男神酒弥豆女神と名下さゝみづ〳〵に係ふ〳〵し

古事記に恭紀に酒見郎女ありし又大嘗会の造酒童女とさかその

〳〵めとゝあり

さがろ　下降とゝさげるゝと自他ありし万葉集に懸有と

さがるとゝあり○魚の自死をゝ水に浮む日とゝをけ沉むに

てわるゝとさがるゝとゝ

さがも　捜字はさも也楓字とゝも字に訓ふるゝで

さゝろ　日本紀に槽とゝあり古事記に酒船とゝあり倭名

抄に酒槽とゝるゝあり又圓槽ありし○大和の岡寺のほとりに

志の酒敬ありとゝ〳〵とり石面に槽七道と彫刻せり

さゝどの　酒殿とゝあり○酒殿とゝハ神楽也○内酒殿朝

野群載に見ゆ

さゝなみ　延喜大嘗式に酒造兒酒波布とゝあり御酒波多

明酒波の別なり

さゝとり　宴とゝ酒と盛の義也万葉集に肆宴とゝあり

かゝハ杯に人自ら的てまゐるとゝ也なのゝん月のゝん内宴賀宴

曲水宴重陽宴なとゝ也

さゝゝ　日本紀に倒とゝみなとゝ逆とゝあり志後ハさゝ也

てさゝさゝとゝも〳〵とり古今集にとゝあり

さうーみ　竹の名物にさうーみとうてかるうおとこんさ
うーつて紙かき出すく耻とうんをんかをみえうう
さがらめ　其初遠州相良の海ーうにさうの名を得うう
○さがーめ　蘇ひう
さぐらう　古事記に山代国に相楽といふ懸木といひ
万今相楽といふとこ圓野比賣の故事也万葉集に山代の相楽
山のとうんをかう
さうづら　鎧ふりの逆頬の姿異記に有人髪生逆頬かとこの
今の頬當也とーつ○小葛の姿ひうえひーかとーいつ○鳥
ーりの鎧の姿に同ーきーや鳴ーに似うう東國にかうといつう
さうーう　坂鳥の姿万葉集に松ーうんまーてかーうう鳥細
張坂手かーうめうーうを也又秋の山をとうめうといつう
さうーうぐ　神代紀に剥字とーうーみ古事記に逆剥とーうんーう
つ中臣祓に生剥逆剥とかーーいつ獣を生かーーに剥と逆ー

ーに剥と紙つーてうかーーー俗に逆ぐりつけといつかーーて儀
式帳に逆剥かーー生剥に對ーいつて殺ーて後に剥といつ也
さうとけ　梅宮に坐て三千代夫人と称て神宴解齋とりて
杯に浮に橘と仮ひーーう酒解とかーーて也その後日如紀に
四葛城王に橘宿禰と仮ひーー時のうの也○伊賀に酒解神八大山祇
神也と永閑伊賀名所記にうう○式に自主手祭未酒解神社山城
国乙訓郡にうう也
さうむけ　逆臚也といつう
さうまーに　新撰字鏡に濩とーうう逆巻けの也攣もうう
淵港又渠灣も同ー
さうこーせ　万葉集に逆言のまーごとーうんをうう日本紀に
倒語とさうーーはごーーうう
さういき　逆息の姿喘逆といつ也
さうーぐさ　新拾に集にとぐさうぐれーーろ木りて造るに

右〻又〻ゆう麻むと逆葦ふまる也ゆゑ万葉集ふ出

さゝりぎ　鹿砦といふ逆木〻もゝとゝゝりぎハとかり也か

つゝ反ぎ也ゆゑハ虎落の訓也棘木と引〻鹿角の形ふまる木

と埋て馬脚と陷ふといつゝ

さうゝて　儀式帳に酒作物忌清酒作物忌ゆゑとゝ

ハつゝとをて

さがりて　髪のさがり也さけ髪ふいつゝえハ際の略称し

さうぎやゝ　酒店ふ杉をとあつめく標として酒林と

いつゝ西土ふ酒望子といふ也酒旂ハさうぎゝ也又もやゝ望

子の音ゆゑ〻〻ものいつゝ

さうやまひ　文選ふ醒とよゝり酒疾の字也万葉集に

いふしけのまぜは吉備の酒やとびきくれ貫簀初りん

漢書丙吉ゝ伝ふ醉嘔〻又〻ゆう

さうみづゝ　古事記の行ふ佐加美豆久良斯〻又〻万葉

集に酒見附栄流（サカフル）今日〻つゝ酒宴とゝ（或ハ沉酒とゝ）延

喜式造酒司坐酒殿神社二座酒弥豆男神酒美豆女神〻又〻

姓氏録酒部公の下ふ賜麻呂号酒看都子賜山鹿比咩号酒看

都女〻又〻ゆう世造酒の才と褒ていつゝ

さうがづゝ　倭名鈔ふ酒膏とゝあり今酒ゆゑとゝいふ也

○酒と直ふあづゝとゝみくゝハ古事記の行ふゝ後世大臣大饗

に弁少納言の弁ふ先少酒と呑ゝ待神といふゝ也

さうでかゝ　多乃りぎまゝる羽とかゝりゝ〻ゝ法性ち

入ゝの行

ゝ多ゝ乃ゝ牙ゝ乃ゝ　さゝ和かゝ

さうのがる　沂とゝあり水とさうのゝるかゝゝあり逆上る

乃義也

さうぐゝら　倍ふ倒木柱ハ倍ゝ也ゝ性ゝとゝり造宅経に

防有倒木作柱令人不吉とゝ

さうつぶり　ム字とあり古文苑王延壽文ホ王孫ムとうん
えりさるゝ倒懸といへるなれて逆頭の義なり
さうむかへ　坂迎の義京師の人糸義セ代俗語迎へるを以
ちりて京へ下る人の分りとなる坂まて出迎へるの義なり
関迎ともいへり人を迎ふるホ四方の実ちゝ吳紀の例也ホ
も西出陽関無故人といへり○佐渡ホかまひの大ちゝ紀ホて
さかしをかり　拾き集ホふあり然ハとゝのりの義なし
さうゝをぶくろ　延喜式ホ槽嚢とゝへり
△さぎり　神代紀ホ霧とゝあり或ハ挾霧ともスるさハ
發語なり
さきに　向とゝあり郷も通ゝ嚮ともゝ仍ゝ向者も同ゝ往
日と往ともいひ日ともいひ又日也日者ともいひ曩又曩日と曩
者ともいへり史記の注ホ乃者猶言曩者とゝる院籍ゝ歳ホ乃昔とい
ふも在昔ホ同ゝ列子の疇昔もさるホとゝむ　昨日往日前者

皆同ゝ訓もまゝ同ゝ者ハさん同也といふ　佶佶のさうさゝ
ふさゝ也
さきて　先手也ホ日本紀ホ先鋒とさきゝとゝあり唐書ホ
朱全忠先手ゝ行りて通鑑正誤ホ如奕棊ゝ先手也とゝる棊ホ
てハせんてゝいふ
さきら　撰集抄ホ多くゝる幸福の義ら八佶助也
さきづ　彩撰字彙ホ英とゝあり咲出の義ゝや
さきゝ　大殿祭祝詞ホ今世産屋以辟木束稲置於戸邊
乃以米散屋中之類也ゝ乃ゝとゝ辟ゝる材といふ也
さきぐ　宣命ホ先ゝ乃御代御代乃倒ゝとゝあり
さきかけ　先驅の義殿最の最也神代紀ホ先ゝ行ゝひと
ゝあり或八斛とゝみ東鑑ホ先登とゝあり物ゝとゝ紀ゝちゝ
ゝふゝり
さきがゝ　入銀ゝもいへり正字通ホ贇八買物先入直也ゝとゝ

ええう

さささとちゝ　　警蹕のこゑみゝ也前と追の字なと揚て讀

と與ふる也

さきゝくに　　万葉集よりえんえんより幸延國の字加し

さきだぬくい　　俗に後悔さきに不立といふ也

さきえゝひのかゝ　　神代紀に先驅者とあり

△さく　　下とあり さげる也

ざぐ　　禪家ふいつり坐具の字天寶遺事にあり

さぐは　　探字捜字加くとあり 挾縷の字加し長崎に

て遊女の出入と吟味する者とさぐゝいゝ○痛るあさ腹さぐ

れかゝいゝ 袴八文選に瓜田不納履李下不正冠れと也といつて

○下とあり さげるとも同じげる反ぐ也

さくに　　延喜式に狹國とあり西せまきを訓つて

さくの　　菅家万葉集に女へ〜折野とみゆ名不也万葉集

もかゝつげまゝく萩の如くのかゝもあり

さくわ　　祝詞に栄井とあり西紀にも或る福井神とありて

栄福幸加〜同〜○越前の福井同名し栄井宿祢八俗紀に

さゝた　　大和城上郡辟田八さゝたとむ下紀にたゝみ

八誤加し

さゝらわ　　橋井頓宮八俗日本紀に西攝津島上郡也○

橋井の里八水に近〜橋正成朝臣の其子十一歳の正行に

教訓して此里より西行ふ帰れ〜いひ作野翁乃口碑

に西行ふ集にはえんえん

ちを八浮ちゝ孫八底にかけつゝ

○待宵の小行俗の墓も山里にあり○橋井又名八榎巣井高市

郡豊浦寺に西にあり後紀童謡にえんし不也又十市郡橋

井谷村にあり

さゞみ　万葉集一浪の〳〵はいゆきさゞみとある西裂とのこと何ものか

さゝらの　桜野とも姓ありハ王仁の後也

さゝべい　索餅とも禅閤抄ハ麺如索縄也とある

さくらご　桜兒の義女の名故事万葉集ようなるもの

さくらゐん　佐官也史録属員ともとゝむ也西土も隷属の官人と称せり和名抄ハ大史とおゝいさゝ官とゝみ小史とも多いさゝ官とゝあり○墁匠とハ番匠と同〳〵受領せり〳〵ひ習〳〵ゝ

さゝまひ　避廻の義如〳〵し俗作也

さゝまゝ　作毛とかけり凡地之所生謂之毛と穀梁傳にある

さゝてん　釋奠也建武年中行事にさゝてんのそゝぎ

とかゞ〳〵ひてたかゝ〳〵さゞけをもちてゝゝある西そハ胙也大宝年中

さゝ〳〵ゞ　桜狩の義ゝゝとゝゝ也菌狩ゝゝ同〳〵

さゝ〳〵がり

さゝ〳〵いろ　古今集ハ桜色ハ衣ハ〳〵染てきんとある頭註

桜色とハ表白裏濃蘇芳也胡曹抄ハ面白里裏蒲萄染と

桜色とハ表白裏紅梅色とハ表白裏濃蘇芳也胡曹抄ハ面白里裏蒲萄染と

いハ表萠木裏赤也或ハ紫也中〳〵○平話ハさゝ〳〵色とハ

さゝ〳〵がハ　櫻川ハ陸奥又甲斐又日向ハ在とハ書

武州桜田も同名なり○一種の草也ハ也も呼也敗醤ハ似て

紫花なり

さゝ〳〵ゞひ　櫻色とて大き桜の如き如〳〵定家ハ

いせの海のむらゝ浦のさゝ〳〵がひとある海の事ゝゝ

○海盤車の一種乃ゑもそう　採人ともろうそうひ物の名也地久楽也とゝ
さくらびや
○さくらハ地名なれハ人名しゝわゝ倭名抄ハ尾張國愛智郡
作良とゝゑんそう芝也万葉集に櫻因べそう鳴海ゆあめちがく
そうあるも同一
さくらづき　採用の義三月とゝろ
さぐりだく　木とくりぬきて代の木と入るものをいハ小刻
喰の義也
ざくろだち　酒鼈鼻といハ石榴鼻の義形色とりてよゝづり
さくろいし　本草宝石の條ハ石榴子とゝゑ色也
さくらい　神樂岡乃ち寺ゆ行り後拾遺集ハ菩提樹院
の地にて後京院の法名と納めし不也
さくらひけ　遠州榛原郡笠原ゆ行り此池のぬしハ皇圓也と
いへ史才あるて扶桑略記と撰ひとる人にて嘗て祭し此

水主とゝれゝ長壽とたゝち法華會と行ハ依るゝ法華刹
落の師にて事法空房伝ハ今ゝ年ゝゝに祭り行
ゝて孔ゝ人鏡餅と供ゝ沉ゝて上ゝゝと孔の成ゝん
さくいづち　神代紀ゝ裂雷とゝゑ霹靂ハ破裂るとゝ
さくいしゝゝゝと　紅毛語也本草ゝいハ塩藥也とゝゝ平賀
氏の説ゝ上総玉山部郡大豆谷村ゝ出るゝの図物ゝゝ
△さけ　須氏ゝゝ邪氣ゝ乳ゝ出ゝ
さけと　力ゝいゝ平結ゝゝ
げ代布孔記ハ鎌倉下結又ゝゝ今の世用ゝゝ制ゝ
ふまゝゝといゝ
さげーむ　人と賤んゝゝ代ゝゝ
さげもみ　畜準とゝゝ
とさげゝゝゝゝいゝ也
さげあま　彩古帖ゝもみ染の色ハかゝゝゝ也さげゝゝとゝゝ

髮とさげゝる尼也　　墮髻也といふ

さげかゝ　　針と釣下るゝ八的の矢に付たる

さげゝる　　内く行事に四月朔日より九月八日まで下帯をする

さげおひ　　造酒司とゝもあり後古事後小造酒司の大臣と

さけのつかさ　　いふ壺八三十石入や土小瓶くわうまるていづるに二尺ばかり出る

ゝ壺八三十石入や土小瓶くわうまるぬけ出ゝ傍小御ゝ口ゝ人

るぶ一條院の時は故事くに地ゝ穿ゝ世ゝ御門ゝ世ゝ三條院の時は大風吹

穿ゝ世ゝけるゝに御門ゝ小ゝ皆ゝ破ゝ文徳実録ゝ

て彼司ゝ酒ゝ壺ゝ破ゝ大ゝ邑ゝ自ゝ小ゝ邑ゝ自ゝ等ゝ並ゝ預ゝ春ゝ秋ゝ祭ゝ

造酒司酒甕神従五位下大邑刀自小邑刀自等並預春秋祭ゝ

ゝ壺ゝ八此壺の事ゝ

△さこ　　佐古の黨東鑑ゝ西○大和吉野郡ゝさこ村ゝ迫

字佐ゝ又大迫ゝ

ざこ　　雑魚ゝ雑者ゝ雑ゝ安芸ゝ

ゝ雑魚の事ゝ鮭菜蝦菜ゝ也ゝ朱氏談

綺ゝ官ゝ艙ゝ爵ゝ或説ゝ緑鰭ゝ鰭魚

ゝ八ゝ班魚也ゝ○ざこゝ八大ゝ事ゝ吉野十津

川も同ゝ雑居寐の事ゝ

さごろも　　狭衣ゝ又ゝ狭衣の事ゝ○ゝ

狭衣の毛ゝ八尾裏厠門ゝ

著ゝ狭衣乃毛と云ゝ○ゝ

○狭衣ゝ八前齋院の宣旨ゝ

△さゝ　　神代紀ゝ狭ゝ篠ゝ竹ゝ云ゝ○古事記ゝ訓ゝ竹ゝ云ゝ

篠ゝ竹ゝ細竹ゝ篠ゝ竹ゝ也ゝ篠ゝ八倭名抄ゝ西ゝ

の俗字也○神功紀の事ゝ

弗ゝ釋ゝ謂ゝ樂也ゝ

瑞籬乃弗の時代ゝ篠の事ゝ

ひさゝぬし万葉集ニハ神楽ニもあり○江次第ニ石清水ニ臨時
祭試楽ニ舞人呉竹とり〳〵挿頭ニ〜竹文青摺袍ときゝ〜
ゝりされて神楽ニ篠と用ゐる也天照大神磐窟かくれま
せ時ニ天鈿女命の俳優したるひ〜ぎ乃樂ハ始めありけゐ
その時以竹葉為手草といふの舊事紀古事ニハ天ノ○婦
女の頭ニ挿とさゝ〜ハ竹葉ハ名ニ挿ぬし俗謠ニ竹乃
葉ハ酒ニ浸とさゝ〜ハ竹葉注ニ酒ニ名也〜ハ西京雜
記ニもとり文選ニ豫北ニ竹葉注ニ酒ニ名也〜ハ西京雜
りそいとり又小見河ニてさけとゝ〜ハ○たゝゝや糠とさら〜たる
と河ニ和るとさ〜ゝんといふも酒塵の義乃ゝ千し○篠の義乃ゝ
山〜ゝけさゝハ篠の実ハ義也○篠ハ石見那賀郡ニもあり俗ふ
矢の根といふ

ちゝぶ　篠生の義也さゝ山〜ハいふ○式伊勢多氣郡ニ竹佐
〜夫江神社乃ゝ今篠笛の榜の名さゝ乃○佐〜布山ハ出雲ニ
乃ゝ異本太平記ニ

ちゝび　小〜火の義ぬし熾稲火とゝあり以火乾肉也ヒ注

さゝげ　日本紀ニ角豆とゝ乃ゝ倭名抄ニハ大角豆とみゆ九
州及上州信州ニふゝ〜といふさゝげハ実ハ義ぬし実ハ名ニ
行垣かゝれちゝげゝ乃○地さゝげ乃ゝ籬ニ及ぶ○十八
さゝげハ実ハ十六さゝぎといふ十八豇縄さゝけハ裙帯豆也
といふ乃○信濃さゝげハ莢大きゝ信濃ニてハ唐さゝげといふ○
倭名抄ニ雲實とゝ後さゝげとゝ乃ゝ○いとちさゝげハ馬蹄決
明也○さゝげゝハ古事記万葉集ニ指挙とゝ乃ゝ志ゐ反さ也○
隱元さゝげハ黎豆也近乃ゝハ外まめ西玉ニ朝鮮さゝげ伊勢
駿河ニふゝ〜ゝ乃ゝ

ちゝめ　細ニ乃ゝ〜ゝかれハ名ニ伏藤塩筆ニ採民さゝのみと
いふ葦の類ニて編て蓑さゝ又ハ席ともゝらの也といふ田ニ
もつゝるゝ古今ニ

さゝめかるあゝ四れおれこれ所も多けなあこそ独ハ見ぬ所
今もろみのもゝ人一名ひろう緑苔こゝいつ古帖ゝ
山かつの結てかづゝさゝめこそ衣の関ゝみもこやさゝ
○さゝめ谷ハ鎌倉ゝ名ゝ氏ゝもいつ
さゝえ　東鑑ゝ小筒ゝもろ小行枝の笑ゝ酒器也庭
訓往来ゝ小竹筒ゝ作る
さゝがき　篠垣ゝ玉露ゝ
笹垣さゝかきゝ紀ゝ笹の色ハ西せきまて独そ秀けき
○料理ゝ人篠ゝのゝ如く作ゝ
さゝぶき　泥の到て小粽ゝ
さゝやう　遊仙窟ゝ細ゝ許ゝ竹ゝ物語ゝ金の光きや
きゝうゝ
ざゝめく　栄花物語ゝ
さゝもけ　菅万ゝ別ゝ夫木集ゝ秋の野の沖ゝ

しゝるゝゝけゝもゝるゝされハ小竹別の笑也菅万もゝゝ
の物語ゝみゝ千也
さゝはり　小障の笑ゝ障ゝふゝもゝ
ふも○鮫の歯ゝ人ゝ小針の笑ゝ脊鬣ゝて刺の如
しゝゝ
さゝみゝ　水しゝる水也ゝいつ又ゝ水ゝいつ又さゝ
ゝゝ横潦ゝ
さゝいべ　雀部ゝゝいゝきゝ通せり倭名抄ゝ
さゝべゝゝ　ゝ集相伝ゝ也ゝ
さゝへい　うどんゝ形ゝ
さゝづゝ　篠作ゝ太刀義貞勲功記ゝ鹿苑院義持
公ゝ佩せゝ也ゝ明徳記ゝ愛宕山ゝ宝庫
ゝ篠作ゝ太刀ゝて足利家乃主家也ゝ手制ゝ
らゝ号皆紫銅ゝ篠ゝ長二尺七寸則宗作

とて塗鉸こして草こして巻又黒糸にて纏こう稾ハ練物ハ
こ草のこ包みこ漆こ志こう
さこぐろめ　篠垣かしゆひにて蔵かくひとをといふ
ぬくしといふ
さこめゆき　瓦玉集に薄き雪なりといふ
さこやかー　戒人字合紙もこの不ふこえこう細にゆる紙
いふぬくし
ちげらの　伊勢物語ふこに捧物乃袋に音こてかこうち
こちこう格子院の院に金銀のおれに種このこけあとつくこを
といふ
さこれゆこうづ　小石の上に流こうあといふ泊湊のこを也さこ
れこぐこもいふ潺湲とこをこう
△さこや　指矢の家矢数もこう矢なりといふ　源平盛衰記こ或ハ
遠矢に射或ハ差矢こ射こえこいこぬこー

さこづ　皇朝類苑こ中國差圖者或不能也こえこう
こ図抄に指図こ伝こ
さこて　今東鄙の俗こ服といふ布木綿と合せこ刺こ
こうこ石人の服製に同こされハ祇代こうれ衣体なり
さこき　日中行事こえこ格子こもこ木ここうこう今
ぞこき　坐客こちこう古ハ客來ハ坐と設こ西に
いふ客房也又堂と譯せり
さこも　然こも也こハ助語さこをせり又指示ものを
こもいふ
さこつる　指綱の家こふこう指縄に同こ小縄こもいふ
勅字ともへきこや　飾物こハ公卿ハ差縄四位こ下庁縄といふ
もこえこうこを字に指物も差縄こえこぬ　餝物に庁差

法差ゆり

さしゝの　鎧の指物ハ天正以前ゝ云ふ事よしれ
つゝゝおゝゝハ永祿元年のたゝゝ背旗也とゝ
さしぐし　倭名抄小百刺櫛とあり万葉集小刺櫛とゝ
抄ゝ枇ゝもつ櫛　挿櫛乃異也○さしぐしれあるゝハ垢
つゝ紙暁ゝかけゝいゝゝ○柳多紙ゝさゝゝむもぐ
せてとゝゝハ髪ゝさゝ結ふ也○延喜式ゝ女ゝ官位ありけれゝ
角乃さゝ櫛と用ゐしゝゝゝ人ハ考婦先ゝ瑇瑁ゝ用ゐく
玉ゝ美と闘りゝむゝゝ奢侈のあきいんゝもぐかゝゝ
さゝがゝ　三州吉良れ一色ゝ一又餘ゆゝ異とゝゝゝ其色黄金
ゝて甚光ゆゝ面沈の如く全牙堅ゝ筑紫人ゝて山石と呼ゝて
祭事神ゝ用ゝ
さゝかへ　万葉集小玉手指更ゝ○秋ゝ又ゝ指ゝハ
ゝせかつぞハ合ゝも

さゝいゝ　万葉集ゝ月照臨ゝつきさゝいゝてゝゝあり
さゝゝゝ　雲図抄小指合ゝゝゝ○月のさゝゝゝさゝゝひ
ゝゝゝ
さゝざゝ　指竿ゝ漢小黏竿ゝゝゝ
さゝおく　措字閣字ゝ紙ゝあり
さゝくむ　水ゝ涙ゝゝゝゝゝ指汲の異也○源氏ゝさゝゝみ
ハかゝゝ紙ゝきゝゝゝゝゝつけゝゝ也ゝゝゝ
さゝひき　進退ゝゝゝゝ武備志日本考小拐ゝ譯せり
さゝゝゝ　古事記小支加ゝゝゝゝ
さゝむゝゝ　正月の法孔小柳系家常法殿小於ゝ差蓙の法禮
ゝゝゝゝゝゝゝ
さゝゝゝ　古事記小刺ゝゝ坐ゝみ
さゝかゝゝ　日本紀小鑠閉外門ゝゝゝゝ
さゝゝゝ　搗字ゝゝゝ指招ゝゝ美揮ゝ同

さしはさむ　挟とよめり指夾の義挟持の意也古事記にハ刺挟とよめり

さしかゞり　さおかゝりといふも詞也しハやゝある詞也といへり又盃指かゞりともいへるも同じ詞にいへるなり

△さすば　摩でとよめり挟磨の義也

さゝがに　源氏にみえたりさがにがにの如しといへり

さもこし　砂石集に指事ありて関東へ下向ましくみえたり今もさせるともおしといふ也

さものみこ　さきの緒より出たる詞にや式ハ掌を指ちめさる乃さにやと首物語にみえ今俗に赤裸をさしなどいへり阿部泰親をさいひし事も物語にみえたり泰親ハ晴明五世の孫也

△させ　古髓脳に螽(キリギリス)の名ハさせといふそれによりさせとなくといふ後拾遺集の序に秋の虫のさせるにやしなくてもあり西州にてハくろつゞといへり○させるハ徒然草にも見え今もいふ詞也

させつゝせ　牛を使ふに左右をさしひ右へやるをへつせといへり左せ表せの義にや牛を扱ふ畜ト養牛ハ必二人の童が扱ふをハおそがいへにさせいへりせい土たりてたまるをさひいひ右へやるをへせりいふ又へつせをやりせるもいふ也

△さゞそり　伽羅にいふ蠻國の名也といへり

△さだつ　倍活也少の義なるべし

さだうし　茶湯也中山傳信録にも王宮執茶役者曰宗叟又名御茶湯とみえたり日本乃風を摸せしとみえたり宗と称するも千利休の名をとる成べし○茶博士字ハ水滸傳にみえたり

さゝけ　佐竹の姓ハ太平記にみえたり

さだめぶみ　定文也祈年穀廿二社奉幣の時にあり江次第に伊勢依可ト定不吝入定文とみえ石清水臨時祭にもあり

△さちゆみ　さちくと　神代紀に幸弓幸鉤とかけり

△さつうし　茶桶の音也茶の湯につかふといへり

○さつき　近年水車紅車渡氏車の名ありさつまわるかと
白神楽岡家の書人丸筆とみえたり
ざつき　三代実録に雑伎とみえたり
さつひと　万葉集に薩人とよめり猟師をいふ也さつハさち
乃約猟山幸彦海幸彦の事神代紀にみえたり万葉集に
玉蜻の夕去来ハ佐豆人の弓月か嵩に霞たなびく
ざうちく　俗語也雑駁の音なるべし
さつきげ　盛衰記にいふ五月毛ハ鷺毛也入道ハやかて葦毛也
さつゆみ　万葉集によめり薩人のもち弓をいふ幸弓とよめり
さつちり　さハやうの事をいふ俗語也つちりとハ助語之尾州
にてつりといふ
さつきやま　五月山也津の国にありともいへと茂の照射
よめるハ唯夏山乃義なるべし
さつきやミ　五月闇也五月雨乃ふりまさる比をいふといへり

ざうちやう　朝野群載に山城国雑掌秦成安とみえたり
さつきのたま　五月の玉也薬玉をいへり
△さとこ　万葉集に里回とみえたり郷曲といふか如し
さとび　里ぶり也ぶり反び也源氏にさとびたる声してひなひ様
紙よりもしぬさとびんとみえたり○あとといふハ詩に守家一
大迎入吠といへるにや
さとみ　里見氏ハ太平記にみゆ
ざとう　座頭とよむハ盲人乃頭をいふ意にて公法にも頭
と盲目と称せり訓蒙字会に盲或尊之曰先生と如し○平
家物語をかたるハ建文中の生仏坊より始まりそのゝち後然茂ま
其名を次と如一建業として次と覚一建業とよべり
然て一方城方とわけて二流となれり○周防のほとりハ土に頭といふも多
し琵琶法師也○鯨に座頭といふもあり座頭の琵琶を負たる
形に似たりとて名付たりといへり

さゝぶね　藏玉ふ車の実名也といふ里舟の義
さゝの〜　琉球王近侍小童を称て里子と里子ともろ正従八品の官也然中ゝ録しは里生ゝ名也
さゝれかど　和名鈔ふ閭閻とよめり
さゝだいり　建武年中行事ふ里内裏ともろ里第ともて御在所ともるゝ名也應仁後ふ此事なし
さゝひゝむ〜　里ひゝむ　瓜瓣といふ實子ゴの義也
△さゝかど
さゝぐ　姓ゝ真田ともろさゝかはさゝ也和ハ信州上田乃奥也佐那田与一義忠ハ三浦義明ゝ姪也義實ゝ子也○綬の訓ゝ
さゝぐ　狭サの織乃義のゝ反ゝ也乃聚集ゝ狭織ゝ帯とゝ
えゝとゝ　又ゝ岡牛乃略也天正の比岡氏大小のつゝと本紙の
の事ゝ纏ゝるゝいふゝ名ゝ
さゝみ　小波也といふ

さゝぎ　参河國狭投山ハ大雄命とゝ加茂郡也宮ハ東西ふゝれ美濃尾張三河の三國ゝ跨る紙ゝ二ゝ乃義
○古のふゝ山ハ此也といふ也今ゝ人乃ハ額田郡ゝ在て北也
さゝぬ　然れ〜でもの義也
△さゝぬ〜〜　らゝ反るゝ同〜小寢の義也
さゝこん　寝床の義也といふ泥氏ゝ
ゆゝとゝこん　くゝあもゝさゝこん中ゝ人ハ上ゝ乃れゝも
△さのかゝれる　花の義乃ゝ
△さばま　松茸紙泥氏ゝ
のゝ上ふゝ
さゝぐ　澤田也陸機詩疏ゝ
ゝ稲とゝ　沢のゝ〜れの深き田郷也
さゝ〜　類聚雑要ゝ移徙作法ゝ
去式ゝ凡國司處分公解差法ゝ

さハやか　清潔の意にいふさつぱりといふ俗語也或ハ爽字
をよめり知顕抄にきよらかなるさハやきそといへるハ遊仙窟
に肝膢をよめり
さハやけ　倭名抄に黄菜を訓せり拾芥集にもみえたりさハ
やけなるを云へし
さハし　今昔物語に見ゆさハしと昔ハ徒然草にさハ
しくもりかへんとおもへることゝいへるなり日本紀の釋にさハや
か也といへり○埃嚢抄に約とよめり今せハしといへり
さバしば　小走の義なり點字さバしばするといへり
さバかり　然許の義さほどいふに同し
さそりがミ　臨時祭式に客等入京前二日京城四隅爲障神祭
とよむ崇神といふも同じきにや
さゞかく　和名抄曲調名に狭鰭川律に沢田川の曲といふ是
なりといへり

さハひこそ　さハ發語遠越の義にや
さもひこひ奥山里のませの内にかりくまりかハそくてかりけり
さハぎきやう　救荒本草に山桔梗とみえたる是也○あざ
ともいへり
さハでのみね　拾芥集にみえ奥州にあり湯本とも二箱の湯
ともいへり
△さひめ　俗に堺ともいひ風土記に石見国與出雲
国之堺有佐比賣山とみえたり
さひち　新撰字鏡に鰂とよめり又鮒でまめまて字書に考
得ず今鯉に似て小なる魚をさひといひ又丸たとよぶにや
さびづゑ　倭名抄に鏄とよめり鋤屬也といへり鋤杖の義
なるべし
さびあゆ　宿鮎の義也宿鶏と義同し
さびらき　小苗開也といふ初る日といへり

さびごろも　舊き衣といふ　後古今集
山ひこのこゑ　宮ぢ　さびつこゑ　音やわ　きこゑん
さびてがね　新撰字鏡に鋼とあり字考得ず
さびつきげ　ろふいり宿　万葉集に辛雄に春とはぐくさづくに同
さびばこや
〈さ〉
さり今お世にさりといふ　倭名抄に鈔鑼二音與沙羅同俗云沙布羅とええ
白絅　さりとりて　鈔鑼は白絅とり　造るに　し音のごとき
ものかれて響鈴ともいふなり
ざい　雑仕　ちりの仕の転也○小絅の転也
南部　そらつ
ざいに　餅に種々の菜煮てかく煮てあつ物とし年始に祝
ふと雑煮といふ畿内に又かんともいふ養也浪合記に尹良親王
の弟子良三王賊のためふ名びめれ津島に移りたるひ対永

享八年正月元日の雑煮となり蛤と昆布にて酒と進めま
ゐせ糲飯に大根の輪切の汁ぬたつくり鱠と酒しけ年
ゝりめてたかりし久津侍の四家七黨より始て山ゐ尾州
濃州勢州の俗しるもりこゑ
ざふたん　永正記に雑談とあるもり
さふかい　挿鞋の字也延喜内藏寮式に名目抄に天子
着之臣下不用之
ざぶ〳〵　水に渉る音にいふ今昔物語にあるもり
ざふしき　花人所雑色かしこの職原大全に雑色は良家
子補ゝ良家子諸太夫ゝ子也ゝ職原大全に雑色は良家
ざつしきは中ゐ〳〵はさがるむまやれ志〳〵はわがりや公卿は
中ゐとざつしきといふとうんえんゝり今の雑色は義満將軍乃
外より始て京師の四境と警固せしむ〳〵ゝ家所厳五節句
乃実に舞の雑色等とゐとは舞者と同じ〳〵ゝ通典に

今州縣官有雜戦者掌行鞭撻ともいふなり

さくらひか　禁裡女房に候名あり云名なり候名ハ下臈ハ

に称ちらしなりなり　遊又邀とあり支へ断引れ義也

△さくぎら

△さまで　浦安ふるの今の口語に同じさハ去及ハ如し

さまく　俗語也様勢の字ふ也

さまく　小股乃義やうるとくびなり相撲乃事

いハ西土ちり事ちたさまくといふなり

さなたぐ　妨字とあり小跨末のと如しげるなくも

拾遺集に乃ちなたげとあり

さまたげかく　称名院吉野紀に西入たせれ多年ハ

いへもハ今も同じ

△さみも　人とさみもといへ挾の義也文選に又あり又

裲とあるも狭也と注せるふよりも

さみ　さびしに同じ又乃孫集にさみしさとさみしし

いるハ強とのくるせとるなり

さみせん　三絃とハ三線の義也三味線ハ舊唐書

に三絃琴の名あり楊升菴集に今ハ三絃始于元時とも云

箏のことハ斗為巾の三絃なりやうなるなりし○三絃の胴と胴

に猫の皮を用ふハ猫ハ人の膝に據ふるなりとも

と永祿の比琉球國ちりつたりと慶長の比ちり淨琉璃ハ

あるも西宮の傀儡師とかくひしりなりしとも

寛永の比風流のテンみつの印ひけばといふも皮也といふり琉

球に八俗皆三絃と弄も相伴ひて絃の響能蛇害を避とハ

又二線三線四線長線の別なりとも

△さん　器の蓋なるん小木とりとハ算木なり出る強如

し或ハ桟を用ふ説文に算長六寸以計曆數とあるなりさん

たりなりいもも如し○さん一位さん三位なりいハ散字也

宮職なりといへり

さむし　寒涼といへり覚ることなり

さんづ　こゝろ行いとこの義骨相の三行なりとくもあり相馬經ふ三封とこゝろ多り盛衰記にさんづとも云

さんえ　俗にいへる三衣也一に僧伽梨云大衣二に鬱多羅層云中衣三に安陀会云下衣とも云○三衣匣ハ金玉義林に出

さんげ　懺悔の字梵語なり懺ハ陳露先惡辞悔ハ改往修來語と注せり一説に懺具云懺摩此云悔過若云懺悔者梵漢並称也もいつり○最勝王經講にいへハ散華也散花机侍中群要見也

さむやく　新撰字鏡に疼とあり○今俗寒氣といふこと

いつり

さんぐ　庭刈往來に散とこゝろ

さんかう　遵生八牋に生香とこゝろ多り○本草に栈香入水半沉沉香入水沉とこゝろ

ざんそう

さんぞわ　撫談注要に説奏とこゝろ

三拜ハ天竺の法也とて御焼にハ三度御拜を仏拜と西宮記にこゝろ俗に敬拜のこゝろいふも仏にもこゝろ同也

さんもわ　俗に寒酸なる摸樣といへハ山水の音如し

ざんない　俗沼也無慚の字入りむざんといふ同じきなり又

ざんぐ　参宮也押出神宮とも中ハ伊勢両宮なり出ハ伊勢まわりまわると伊勢まわりと唱ふる意同じ海東諸記に東海道の事と記し有天照大神初國無貴賤遠近皆來謁とこゝろひろまりて

やぬけまはりれやうなり

さんもん　劉敞曰天子諸侯皆三門而名不同と今寺門に
三門あるハ僭なるへし三門記に三門門ニ三途唯王城為然とさ
れと唐玄宗より宮観天下に遍くして道教を崇尚せしより
より道観にならひ本邦釈教盛にして伽藍に施せり要覧には
一門亦呼為三門者何そやとて佛地論を引て三解脱門為所
入處とみえたり

さんまい　散米とかけりそのうちまきの事なり○俗
に墓所をいふハ佛家の三昧より出たり口遊に何さんまいといふ
も亦同し出羽の方言に似なけといふをさんまいにあてたり

さんこう　参候の字唐音なるへきなり

さんとめ　聖多黙を譯して利未亜の内蛮国の名也さんと
め縞なといふハ此国より出る也又此島に在る菓ハ核なしとぞ此国
の鮫珠を上好とす暹羅東埔寨より来るも也

さんがう　三議一統に三峯膳ハ中に蓬莱右に方丈左に
瀛洲三の形を羹して作り銚子に盛也とみえたり○春盤を蓬莱
飾と称するも此より出たるにや其かざりものゝ山家質素乃風
俗よりや始りけん元日にいはしわらめを用ゆる事ハ延喜式にみ
え土佐日記にもみえて久しき風俗なりけしされと堂上にハ
のし鮑昆布二種を硯蓋に盛て三方に載せ年始客對面には
主人の前に俟へ主人より客に進むる也

さんぼう　三方と称する器ハ古へにいふ公卿也山槐記にみゆ四
方なといへる名目も三方よりおこるなるへし四方の盤ハ天子親王大
臣に用ゆる也又神前に用ゆる人器なるなり○東鑑に時頼改
定五方引付衆為六方後又縮之為三方といへるもみゆ山田三方と
いふハ伊勢山田を三分したるより昔ありしにや須原方神人
坂方神人岩淵方神人と記せしより明徳の申文にもみえたるなりと
そ山家三方衆ハ三州也作手(ツクテ)駄峯(ダミネ)長篠といふ○三宝ハ佛法

僧也三宝乃奴止仕奉流天皇聖武紀ニハ呉唐拾遺録ニ
梁武帝事佛捨身為佛奴ト云リ智度論ニ佛如醫王法如良
藥僧如瞻病人ト云ヘリ

さんしゃ　三代実録ニ散手ト云倭名抄道調曲ニ散手破
陣樂俗云散手ト云ヘリ

ざんぎり　今東洲の花子ハ皆此風俗也孩截の字如し列子
ニ南國ノ人祝髮而裸注ニ孔安国注尚書云祝者斷截其髮
也ト云ヘリ祝髮ハ髮ヲ剪ル也今剃髮ノ如ト云ハ非
也ト云リ

さんめり　去ヌトアリ　さりぬる也書牘ニ去幾日去幾月ト
云ハ通鑑北史ニ見ヘタリ

さんだて　三番叟ト云リ神功皇后の名ヲ付キテ翁
の代ト云ヘリ説ニ採菜老ル假面也ト云リ

さんぢゃく　散杖ト云リ花盤散杖ト云御齋会ニ云リ

さんとみだし　盛衰記ニ云ヘリ算ヲ乱ス義算木ニ云ヘリ
○全漸兵制ニ課命士ト云ヘリ○書叙指南ニ卜筮
家曰術家ト云ヘリ○杉筆ニ云ヘリ西土ニ圭埵ト云
ヘリ

さんたいえん　三臺塩ト云リ疏勤塩曲ニ隋唐以備燕樂者
ヘリ

さんちまんまぐかてう　聖老楞伽島ト云リ利末亜の内蛮
国の名也

さんふらんしすこ　切支丹類旅の名也

△さめく　然めくの義也○新撰字鏡ニ湯又濊ト云ヘリ

さめこは　環眼馬ト倭名抄ニ云ヘリ小眼の義ニヤ○ひぞり
さめみづさめかくけさめちゃ　笠ヘリ臨時祭式ニ白眼鶏毛馬ト云ヘリ
ひし　詩朱注ニ二月白日魚似魚目也爾雅注ニ魚ヲ謂ニ環眼
馬ト云ヘリ

さめうし　松浦紙に牛はさめとゝえたり
さめのり　閩中海錯に龍皮苔紫黒色形似鮫皮とゝ
さめがぞ　鮫皮の義人の肌膚の麁〻きを物といふも同
倭義にさめのかゝとゝ　かく刀鍛を飾るといふ
△さり　倍に食物をとゝ事をいへり　物にらきれ義也
△ゝゝり
さもさゝず　然もせん也今さゝず　ゝゝりおやなさ
さもさゝず　萱家万葉に　さもらひとみ西然も母乃
義なべし
△さやめ　神樂にて西あやめ也といふ
さやま　狭山の義端山の言なりといふ
さやゝ　源氏伊勢物語に西芳谷の言名にて然様とも
ゝゝ西のゝくゝ
さやゝ　万葉集に西さやゝ也さやゝはそゝゝ同し

△さよのかうやま　狭夜の中山とも　つかへでおげて
間きたれてさ私といふ　さやゝもいふさよと言同
さよかうといふも中山ともいふれハ長山乃強いかゝ一説に
ゝを佐野郡ハさやの中山といふさよといふへき理なし
いて後日本元正紀に佐益郡とあり
△さらさ　常に紗羅紗とも　蠻國の名正にハさゝあさ
といふ阿蘭陀の商人行て交易もて　ゝ布といふ
遲羅染ともいて又金ゝ　○梅桃なれ名くゝ花の
紅白の雜色ゝの紀布に似ゝ也
さゝぞバ　不然者の義にいて　さゝでハ然らで也
さゝゝ　源氏ふいそちゝ　ゝをゝえゝ　糙渋のを
也さと濁ゝ同　○ちゝ　ふゝあらハ　ふゝふし　○を
ざゝゝん　なゝハざゝゝん　傚ハそゝゝゝんの義なへせゝ
なんハ負せばゝゝ　ゝんの義なへ　すなわざや

ざらま　ざらんと粗同　すあるざらまじはざらまじ
あらまほしく約めていふ也
さらしれ　信濃に更級郡あり更は真は級はしなの本
といふ如し紙の貢延喜式に信濃紙中に更級
郡牧の産潔白乃ち今の[illegible]と云ふ○楠正儀に足利義詮
に狩ひさらしなの山に男山をかけり
さらかり　花笠紙に何はさらしなと多くよめり再ひ改めていふ
べかりぞとの義なれど更也は謂也
さらかし　霊異記に生とあり
ざらつく　西土の書に沙といふ硬砂なり西又糙濇とあり
さらてだし　さわらぬさふ也といふ
さらがつる　俗に西交返る也
さらたらる　俗俗也文に沒められ也
△さらい　過去しなしは助詞也

さらとも　然りともれ然也去ふりとり〳〵先と押て祝お
のれ〳〵祝也志名伊勢物語に雖然の字に拭めり
さらかが　然有れかの家也
さらげれ　然りと乱れ乃家也
さらぬべき　然りぬべきのさ也
さらおや　離書と世に去れといひ又いとこ乃ち〳〵○藤
為家越部氏と嫡子為氏に許與し又少子為相と兄し為氏と
して為相に譲與へしむ其詫文と去れといふを親墨今富豪家
に蔵在る
△ざらし　撒兒木とろうざるもいふ西天竺の北方にあり
さらめ　蛮玉也
神代紀に猿女君〳〵えて姓氏也鈿女命の後裔
の神代紀に○琉球にて神所憑の女を君〳〵称そこも鈿女命

の顕神明之憑談とかるよをおきたる事なり其女三十三人の
ごとく皆酋長の女なりといふ
さるざ　祁乳牧慶金郡ふ猿田といふ石ゑんそう今齋田と
いふ里也猿田彦神の由緒ある地なり
さるこ　今昔物語ふ猿能とゑんそう心養生記ふ猿能
かうしやいつうとゑんそうあり猿能とゑんそう
さるさハ　猿沢ゑんそう池ハ大和春日ふたり姓とも呼つゝ兼文
記ふゑんも
さるがき　駿州の名也芳州ふ猿のかつきはなさるれまうと
いなむかゝて実のゑゝの也
さうさま　伊勢物語ふゑんもゑんそうとなるて然
様かれむ去うさはゝといふ同じ
さるかゝ　物あるゑゝといふ猿
さるくつと　猿鐃の笑也人と略賣もゑゝのさるぐつと

ゑゝといふゑゝかうあいそんとてハ古きゑゝといふ唐書ふ
木九かうゑゝもいふ水滸傳ふ口裏都塞ふ此三麻核桃とゑゝ
さるまハ　狙公也荘子ふ狙と芧と與ふゑゝ也○侯赤ふ必猿まハ伊扶ゑゝ
三の術ハ狙ふ芧と與ふゑゝ也朝四暮
厩馬の用せゑゝ木のゑゝくハ
さるのこ　かけ　瘻花ゑゝといふ酉陽雑俎ふ胡孫眼とゑんそう
胡孫ハさる也
さるまのぶゑ　猿松笛の笑夢溪筆談ふ額呼子也といふ
猿松ハ俗ふ苦くロと皷くゑゝ諢名也
さるれみさけび　猿の三呼也詩ふ三聲かといふゑゝ峡猿の物かゝ
しきとのべゑゝ　巫峡啼猿数行淚かゝもいふゑゝ五ゑる也躬恒集
猿の行ふ
△ざれ　ゑゝあゝハみゑゝひといふゑゝひゆゑゑゝあるゑゝんゑゝきがセざゝかん
雑猿樂記ふ京童の虚左礼とゑゝ職人行合ふざれ

行物語などみたるなどいふ俗ふおやもとゝいひ
物ゝておやらといふおやゆゑ也俗氏ふぞれくりぐ
去曙抄ゝそぞろなるざれわらうたるも
ざれごとゝ　　无名抄ゝ吉今集を評してざれごとゝ言まてと
りゝさび撥い我ゝうとゝ云ふハ俳諧言とさゝていふ如し
△ざろく　坐筭如し曲录ゝ
曲录ハ禅録ゝゝ四录ハ筭ゝ似ゝ
△ざつゝ　藏王菩薩ゝも金剛藏王ゝもいふ吉野乃像ハ金
剛童子也密家の曼荼羅ゝて考ゝ千手の形ゝて青色也と
いふ元亨釈書ゝ年尼應化藏王菩薩也とゝ
さゝとゝ　挟濱の家如し○狸のさゝゝ庭訓往来ゝ
ゝて熊の蹯とゝ
△ざわ　麈とざわといふも呉子ゝ麈左而左麈右而右とゝ
ゝ左右の音とゝ如し麈とつゝ付のざわも同義如し

神別記ゝ採青竹葉括合揮ゝ指揮無是今ゝ示軍麈之縁也
とゝゝ武備要畧ゝ日本の兵制と記ゝて中國以幟彼以
標といふもざわゝ也といふ○二条良基公の名ゝさわゝと
ゝ左右ゝ云ふ如ゝ
さわご　白氏文集ゝ最期ゝゝゝゝ今人のきハといふをゝ
死ゝゝハ倭語如し
さわて　物語ゝゝ四最初の音也○俗の口語ゝさいてゝ
いふも実熟のゝゝられゝ无其初ゝいふ
さわそく　催促の音也
ざわあい　朝野群載ゝ最愛子息弟即等ゝゝゝ
さわて　松茸紙ゝさわゝてゝ車ゝゝゝ
やいゝゝ也ゝいふ最極の義也
さいづち　倭名抄ゝ柊撥ゝゝ小椎の義ゝ休め字
畿内ゝ番匠ゝ西國四國ゝさいづちゝ

さいかち　皂角子と文音の轉訛せるなるべし　猪牙皂角
あり本邦に生せず○肥皂夾ハ別種なり又波羅門皂
莢なり

さいろう　炭斗に入る菜籠茶碗とて圓角平三品あり

さわまつ　歳末と賀するなるハ義政公のはじめなるま
ちがいなし

さわうさ　左右左也拜舞奉幣といふ俊頼

拍木と椎のさはにとりかけ〳〵左右左ますやゆまろかん
祇注に兵部の官人の四位にいたりてひやすりとつかへたり○大神
元年中行事に大和寮と述て宮司并中臣左右左舞也神主右左
右舞也とつかへたり○右左右左と舞といふるも拍子なり

さわげしき　禁祕抄小歳下食とつかへたり江次第抄に下食
者鬼神之名此日沐浴則鬼祇頭而髪落故憚之と和名抄に鬼祇
頭と載て師説に以天狗下食所祇是とある簠簋に減食日とつかへ

東鑑に天狗下食とつかへたり天狗星の粥作る日と云○
時下食なり其時を避て其日を忌と云

倭訓栞中編巻之九終

国立公文書館
National Archives of Japan